宮崎滔天とアジア主義

嵯　峨　　隆

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第14巻第２号（2016年３月）抜刷

宮崎滔天とアジア主義

嵯　峨　　隆

はじめに

本稿は宮崎滔天（1871〜1922）とアジア、とりわけ中国との関わりを、思想と行動との側面から分析し、その特徴を考察しようとするものである。

滔天は、近代における日本と中国の革命的連帯を象徴する人物として、これまでの研究では極めて好意的に評価されてきた[1]。それは、彼が同時代の国権主義的アジア主義者とは対蹠的に、民権派アジア主義者であって、国利国権的思考とは全く無縁な人物と見なされてきたことによるものである[2]。そして、その連帯論は孫文の革命運動の支援を伴うものであったことから、中国では今日においてもその功績は高く評価され、日本人の中では数少ない革命の功労者の一人に列せられているのである。

それでは、滔天の中国革命支援は如何なるものに由来するのか。それを一言で説明することは容易ではない。ただ、それを「侠」の精神と結びつける見方は以前からある[3]。実際、滔天自身も著作において、しばしば自らの行動を「侠」の精神と結び付けて論じているのである。「侠」の精神については、これを日本のアジア主義の「反知性的・非合理的なロマン主義的性格を濃厚に帯びていたことを、如実に示すもの」[4]とする批判もあるが、そもそもアジア主義の出自こそ反西洋的ロマン主義に求められ、それが後の発展の力となったことは確かであろう。滔天の「侠」の精神も、非合理的であるが故に彼をして中国に心情的にのめり込ませる一因となり、アジア革命を追求

1　これまで、滔天に関しては多くの研究がなされており、アジア主義の思想潮流の中での彼の位置づけを問うものから、革命論の形成に主眼を置いたものまで様々であるが、評価は概ね好意的である。伝記も数種類出版されているが、代表的なものとしては、渡辺京二『評伝　宮崎滔天』（大和書房、1985年）、上村希美雄『宮崎兄弟伝』（全6巻、葦書房［完結編のみ熊本出版文化会館］、1984〜2004年）、榎本泰子『宮崎滔天』（ミネルヴァ書房、2013年）などがある。

2　上村希美雄「アジア主義―宮崎滔天を中心に―」、西田毅編『近代日本のアポリア―近代化と自我・ナショナリズムの諸相―』、晃洋書房、2001年、127頁。

3　衛藤瀋吉「滔天と清国革命はどうして結びついたか」、『思想』525、1968年３月、20頁。また、渡辺京二の著作は全編が「侠」をモチーフとしており、榎本泰子も「侠」の思想の影響を指摘している（前掲、109頁）。

4　深町英夫「近代日本のアジア主義を振り返る」、『東方』394号、2013年12月、25頁。

させることとなったと考えられるのである。

しかし、本稿は滔天の心情レベルの考察を主たる目的とするものではない。むしろ、時代環境の中での彼の具体的言説と行動を追うことによって、近代日本のアジアでの在りようが問われなければならないと考えるからである。以下、本論においては、明治から大正にかけて、日本が次第にアジアの盟主たらんとして大陸への関心を深めて行く時代環境の中で、滔天が如何なる形で思想形成を行ない中国革命に関与するようになったのか、そして彼のアジア主義は日本の内政と国際秩序の変化に伴い、如何なる変容を遂げたのかを検討して行くことにする。

第１章　支那革命主義の形成

宮崎滔天（本名は寅蔵、戸籍名は虎蔵）は熊本県玉名郡荒尾の人である。滔天の思想形成にはその家庭環境が大きな影響を与えた。自伝の中で述べているように、彼は父からは「豪傑になれ大将になれ」と日に幾度となく言われ、母からは「畳の上に死するは男子何よりの恥辱なり」と言われ、親類縁者や近在の人々からは「兄様のようになりなさい」と言われて育ったのである[5]。「兄様」とは熊本協同隊を結成して、西南戦争に加わり26歳にして戦死した長兄の宮崎八郎のことであるが、彼の死は滔天の中に刻み込まれ、意識の深層にあって彼の一生を支配し続けたと言われる[6]。滔天は八郎を通して、維新のやり直しという西郷の精神を受け継いだと言うべきかもしれない。そのため彼は、「官軍や官員や、総て官のつく人間は泥棒悪人の類にして、賊軍や謀叛とか云ふことは、大将豪傑の為すべき事と心得居」るようになったのである[7]。

「三十三年之夢」の記述によれば、滔天は幼少の頃から自由民権を唱えて憚ることはなかった。1884年、彼は徳富蘇峰が主宰する熊本の大江義塾に入学するが、自らの知識の欠如と弁舌の才のなさを痛感し、加えて名誉心こそ人間の本質とする同学の言に失望を覚え、翌年ここを退学して上京する。東京で彼はキリスト教徒となり、東京専門学校入学後には洗礼を受けている。帰郷後、長崎のメソジスト系のカプリ校に学ぶが、そこに多くの奨学金目当ての「詐欺信者」のいることを知り、キリスト教にも疑問を感じて棄教する。その頃、スウェーデン人の自然主義的無政府主義者であるイサク・アブラハムに出会い、その思想に関心を抱くところとなった。

滔天は1890年、19歳にして前田案山子の娘槌子と婚約する。この頃まで、滔天の大

5　「三十三年之夢」（1902年1〜6月）、（宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』（以下、全集と略す）第１巻、平凡社、1971年、26頁。
6　『評伝　宮崎滔天』、23頁。
7　「三十三年之夢」、27頁。
8　「滔天と清国革命はどうして結びついたか」、25頁。

陸への関心は殆んどなかった[8]。しかし、その彼に熱心に大陸に目を向けるよう説く人物があった。それは兄の宮崎彌蔵であった。1887年のある日、彌蔵は滔天に向って次の様に述べたのである。

> 以為く世界の現状は弱肉強食の一修羅場、強者暴威を逞ふすること愈々甚だしくして、弱者の権利自由日に月に蹂躙窘蹙せらる、是豈軽々看過すべきの現象ならんや、苟も人権を重んじ自由を尊ぶものは、須らく之が恢復の策なかるべからず、今にして防拒する所なくんば、恐くは黄人将に長く白人の抑圧する処とならんとす、而して之が運命の岐路は懸って支那の興亡盛衰如何にあり、支那や衰へたりと雖も、地広く人多し、能く弊政を一掃し、統一駕御して之を善用すれば、以て黄人の権利を恢復するを得るのみならず、又以て宇内に号令して道を万邦に布くに足る、要は此大任に堪ゆる英雄の士の蹶起して立つ有るに在るのみ、吾れ是を以て自ら支那に入るの意を決し、遍く英雄を物色して之を説き、若し其人を得ば犬馬の労を執って之を助け、得ざれば自ら立て之に任ぜんと欲す、故に已に一友と約して窃かに入清の準備を急げり[9]。

彌蔵の主張は簡単に言えば、帝国主義列強に対処すべく、中国で革命を実現し、そこを根拠地としてアジアひいては世界の被抑圧民衆の自由を回復しようというものである。しかし、この時の滔天はキリスト教に帰依しており、彌蔵の説に同意せず、逆に彼を論破してキリスト教に入信させることとなった。だが、前述したように滔天は間もなく棄教する。そして1891年夏、滔天はアメリカへの留学を思い立ち、まずハワイに渡るべく長崎に赴いたところ、やはり既に棄教していた彌蔵が長崎の下宿先を訪れ、再び革命の道理を説くこととなった。曰く、「言論畢竟世に効なし、願くば共に一生を賭して支那内地に進入し、思想を百世紀にし心を支那人にして、英雄を収攬して以て継天立極の基を定めん、若し支那にして復興して義に頼て立たんか、印度興すべく、暹羅安南振起すべく、非律賓、埃及以て救ふべきなり、［中略］思ふに遍く人権を恢復して、宇宙に新紀元を建立するの方針、この以外に求むべからざるなり」[10]。滔天は彌蔵の説に完全に同意した。彼はこの時のことを、「余は之を聞いて起て舞へり、余が宿昔の疑問茲に破れたればなり」[11] と記している。この後の滔天の支那革命主義は、彌蔵の構想を基礎として、滔天の個性と経験が肉付けされて形成されて行くことになるのである。

当時の日本においては、アジア連帯の機運は徐々に高まりつつあった。1870年代以降のロシアのアジアへの進出に対する危機感の増大がその最大の要因であり、既に18

9 「三十三年之夢」、42頁。
10 同上、54～55頁。
11 同上、55頁。

80年３月には最初のアジア主義団体として興亜会が結成されていた。だが、革命的変革によって西洋に立ち向かい、既存の国際システムを変革しようとする主張は、恐らく日本では初めてのものであった。そこには、この後日本の論壇で流布する黄白人種闘争説の構図も見えるが、人権や自由といった普遍的価値の強調はそれらを後景に追いやり、彼らの革命論を際立たせていたと言って良い。そして彼らの場合、「三代の治や実に政治の極則にして、吾等の思想に近きものなり」[12] と言うように、人権や民権は多分に儒教的知識によって読み替えられていた点に特徴があった[13]。

しかし、何故に中国で革命がなされなければならないのか、そしてそれがアジア全域に波及して世界を変えることになるのか。そこに客観的な分析があった形跡はない。滔天らは、ただ中国の政治的不安定さの中に革命の可能性を見出し、革命後は世界を指導し得る「大国」としてのイメージを抱いたのであろう。そして、そこには英雄待望論すら窺え、彼らの中には伝統的革命観が存在していたように思える。また、日本人でありながら、何故に「心を支那人にして」まで中国革命に参加しなければならないのか、この点についても彼らが思い悩んだ形跡はない。それは主観的革命願望と言わざるを得ず、彼らの兄の民蔵が「正義の目的を達せんが為めに権道を用ゆるもの」[14] と批判した所以でもあった。ともあれ、滔天と彌蔵はかかる支那革命主義のもとに、この後中国に関わって行くことになるのである。

滔天が「夢寐の郷国」である中国に初めて渡ったのは1892年５月のことである。大業を果たす準備として、彼の地の言語風俗に習熟する必要があると考えたからであった。しかし、滔天は長崎で友人の裏切りに遭い上海に到着したものの資金不足のため、あえなく１ヵ月半で帰国を余儀なくされた。この時、上海には友人の宗方小太郎がおり、彼が関わっていた日清貿易研究所の荒尾精を頼ることは可能であった。しかし、滔天は荒尾を「支那占領主義者」として、自らの思想と対極に立つものと見なしており、彼を頼ることを潔しとしなかった[15]。彼は当初より、国利国権を優先するアジア主義者から自らの立場を区別していたのである。ここに、滔天らの思想的潔癖さを見ることができるであろう。

帰国後の滔天は「無為の四年間」を過ごしたと記す。しかし、この間の1894年、滔天は彌蔵と再び中国への渡航を企てて金策に走ったことがある。そこで彼は、当時日本に滞在していた朝鮮の改革者である金玉均を訪ね、「天下の大計、それも世界の大勢から説き起して、東洋の現状別けて支那革命の機の迫れることを滔々一時間も弁じたてた」[16]。そして、金に中国に渡る計画があることを聞いて、滔天も同行を願い出る

12 同上、54頁。
13 野村浩一「『アジア』への彷徨―宮崎滔天の思想と行動」、同『近代日本の中国認識』、研文出版、1981年、126頁。
14 「三十三年之夢」、55頁。
15 同上、58～59頁。
16 「金玉均先生を懐ふ」（1916年３月）、『全集』第４巻、平凡社、1973年）、283頁。

が、今回が短期間の訪問であることからと断られ、後でまとまった資金ができた際に同行を許すとされた。結局、この計画は同年 3 月の金の暗殺で頓挫するのであるが、この時の滔天が朝鮮を「牛後の国で、積極的活動の根拠地でない」[17] と考えていたことは、彼の革命論の抱える問題の一端を示している。すなわち、滔天に限れば、朝鮮は少なくとも大国に付する国であって、来るべきアジア革命においては重要性を持つ国とは認識されていなかったのである。

金玉均の死後、滔天は友人を介して炭鉱経営者である渡辺元を知り、この後彼から資金援助を受けることができるようになった。そして彼からは、「時機の来るまで支那商館に入って支那の言語風俗に習熟しては如何」とアドバイスされた[18]。これを受けて、彌蔵は1895年10月から横浜の商館に住み込むことになるが、滔天は彼とは別の方策を以て「支那の言語風俗」の吸収に務めることになる。滔天は、当時「暹羅経綸」を説いていた岩本千綱を頼り、中国人の多く住むシャムに渡ることになったのである。滔天のシャム滞在は、彼の中国人観と革命論に大きな影響を与えることになる。

1895年春にシャムに渡った後、滔天は当地における中国人の活躍ぶりに目を見張る。彼は、当地のあらゆる産業が中国人によって握られていることを知り、「有躰に曰へば、暹羅は支那人に依って立ち、支那人の為めに維持せらる。換言すれば、暹羅は暹羅人の暹羅にあらずして、支那人の暹羅と言ふべけれ」[19] と述べている。彼は、イギリスやフランスが如何に政治を支配したとしても、中国人なしではこの国を運営できないとまで断言する。そして、滔天は中国人の人種的・民族的強さを認識すべきだと述べる。すなわち、彼らは「英露の強よりも恐るべき人民」なのであり、「人種の生存競争の終局は、社会経済の理に依って支配せらるゝものなるを知らば、支那人は将来の世界に於て実に絶大無比の勢力者たるを忘る可からず」[20] とされるのである。滔天は日頃から中国人の自主独立、自律自治の精神と、その実行力の強靭さを強調していたと言うが[21]、そうした見方はこの時期に確立したものであったと言えよう。彼はここに中国革命の主体の存在を認識したのである。

然るに、他方において滔天のシャム国民に対する評価は低い。滔天の目には彼らは「無知蒙昧の蛮民」であって、「到底国民として自立するの資格なき人民」と映った。彼らは朝鮮人に比べても柔弱な人民である。何故ならば、「朝鮮人には衰へたりと雖も自ら奮って国政を改革せんなど志す東学党の如き謀反人」が存在する一方、シャム人は国政を改革しようとか、反抗に立ち上がろうとかする気概を持ち合わせていないからである[22]。むしろ、シャムはイギリス・フランスに虐げられてきたことから、今

17 同上、282頁。
18 同上、285頁。
19 「暹羅に於ける支那人」(1896年12月)、『全集』第 5 巻、65頁。
20 同上、70頁。
21 築地宜雄「宮崎滔天」(1959年)、『全集』第 5 巻、485頁。
22 「暹羅土人の風俗」(1897年 1 月)、『全集』第 5 巻、81頁。

や「押掛嫁入」するかように強国となった日本に投じつつあると認識されている[23]。ここから分かるように、シャムには変革の主体の欠如から主権国家としての自立の可能性はないものとされた。それでは、朝鮮の場合はどうか。国政を改革しようとする謀反人の存在は認める。しかし、それは明確には変革主体としては捉えられておらず、加えて、朝鮮はアジア革命の周辺国でしかないと見なされていた。結局、これら周辺国は大国である中国での革命を経てから救済されるべき国家でしかなかったのである。

滔天が日清戦争について状況的に論じた文章は殆どない。ただ、シャム問題を語る文脈の中で、これを肯定的に評価している箇所がある。すなわち彼によれば、日清戦争は「朝鮮の独立を助け東洋の平和を維持する」ためのものであり、「所謂弱者を助けて驕れるものを挫く」ためのものであったとされているのである[24]。このような評価は、当時の多くの義戦論と殆んど変わるところはなく、彼も当時の時代的雰囲気から自由ではなかったことを示している。そして彼は後に、「［日清戦争以前は］我を以て、弱小後進の島国として軽侮し、以後に於ては、貪欲驕慢の暴国として忿悪せる彼清国は、近時に迨（およ）んで、此迷夢より覚醒して、我が真意を覚悟し来たるが如し。而して、現今露独仏の諸国露骨的に、其野心を逞うせんとするの状を見るに及んで、愈々彼等を悪み、益々我に頼るの念を切実ならしめたり」[25] と述べ、中国の上下の人心が日本に向かう契機となったことを評価している。ここで日清戦争は、中国民衆の中に反ロシア・反西欧の意識を広め、日中国民の親密さを増大させた点に意義が求められているが、これは明らかに彼のアジア主義との整合を図るための議論であったと言えるであろう。彼のアジア解放の思想は、ぎりぎりのところで国権主義との接合を免れていたのである。

第２章　中国革命運動と滔天

滔天が中国革命の情報を得るのは1896年１月のことであった。この月、兄の彌蔵が横浜で中国革命派の陳少白と面会した旨を、シャムから一時帰国し長崎滞在中の滔天に手紙で知らせたのである。しかし、この時の滔天はしばらく静観すべしとして積極的な対応を取らなかった。同年６月のシャムからの帰国直後、彼は彌蔵の死に接するが、これと前後して彼が自らの支那革命主義の実行手段の大転換を図ったことは注目して良い。すなわち、これまで彼は「清国を以て根拠となし、以て東洋問題より、世界問題、社会問題を一時に決せんと」求めていた。そのようにして初めて人権を全うし、天下の窮民を救済し得ると考えていたからである。しかし彼は、「尋常平凡の士」

23 「暹羅国王来遊の噂に就て」（1897年１月）『全集』第５巻、83頁。
24 同上。
25 「幽囚録」（1898年５～７月）、『全集』第１巻、427～428頁。

にはかかる意見を容れる識見が欠けていることに気付いた。そこで、「遂に従来の方法を一変して、俗に入って正に帰し、虚を衝ひて実を出すの道」を採ることにしたのである。これは、「一人の力を以て大業の礎を成す能はざるを知」ったが故であり、彼は「爾来権門に出入し、政治家に交を締して、心にもなき政論を云々し、東方問題を云々して、彼等の意を迎へ、敢て其意を損せざらんことを努め」るに至ったのである[26]。

そうした方針転換の結果としてあったのが、1896年10月における犬養毅への接近であった。犬養の知遇を得たことによって、滔天は兄の死という「失望の谷」を脱出して「希望の天地」に入ることができたのであり、彼にとっては「木翁は余が心的再生の母なる哉」と記すほどの決定的な意味を持つものであった[27]。しかし、それは一方では、「官」を目の敵にしてきた宮崎家の教えに反するものでもあったし、他方においては中国人となって世界革命の根拠地を建設するという当初の革命方式を放棄するものでもあった。これより滔天は、犬養を始めとする政治家や経済人の利害関係と、持ちつ持たれつの関係の中で世俗的浪人として中国の革命運動に関わって行くことになるのである。

滔天の中国革命派人士との初めての接触は、1897年 5 月に曾根俊虎を介して横浜で陳少白と面談した際のことである。滔天はこの時自らの革命の志を告げると、陳は彼に孫文の著作である *Kidnapped in London*（『倫敦被難記』）を与えた。彼はこれによって、孫文の革命的経験を知ることができた。この後、彼は犬養の周旋で得た資金で中国視察を行った後、同年 9 月に横浜の陳少白の寓居で孫文に初めて出会うことになる。彼の前に現れた孫文は、「三十三年之夢」の中に記されているように、小柄な西洋紳士然とした人物であって、滔天の抱いていた革命家イメージを全く覆すものであった。そして孫文は滔天に向って次のように説いた。

> 人或は云はんとす、共和政体は支那の野蛮国に適せずと、蓋し事情を知らざるの言のみ、抑も共和なるものは、我国治世の真髄にして先哲の遺業なり、則ち我国民の古を思ふ所以のものは、偏へに三代の治を慕ふに因る、而して三代の治なるものは、実に能く共和の真髄を捉へたるものなり、謂ふことなかれ我国民に理想の資なしと、謂ふことなかれ我国民に進取の気なしと、則ち古を慕ふ所以、正に是れ大なる理想を有する証的にあらずや［後略］[28]。

ここで孫文が言及した「三代の治」は、予てから滔天が彌蔵と共に抱き続けてきた理想社会のイメージであった。そして、「支那四億万の蒼生を救ひ、亜東黄種の屈辱

26 「宮崎槌子宛」（1897年 6 月22日）、『全集』第5巻、349～350頁。
27 「三十三年之夢」、107頁。
28 同上、118頁。

を雪ぎ、宇内の人道を快復し擁護するの道、唯我国の革命を成就するにあり」とする孫文の主張は、滔天のアジア革命論と完全に重なるものであった。ここに彼は、自らの支那革命主義の実践者を見出したのである。その後、彼は孫文を犬養に面会させて東京での生活を保障させ、生活費は玄洋社から捻出させた。そして彼自身は、1898年５月から *Kidnapped in London* を「清国革命党領袖孫逸仙　幽囚録」と題して新聞に翻訳・掲載し、孫文の存在の宣伝に務めた。

しかし、滔天は孫文だけでなく中国の変法派にも関心を向けていた。戊戌変法の進行のさなか、滔天は犬養の命を受けて中国に赴き動向の分析に務めていた。政変によって変法運動は頓挫を来たし、康有為は北京から天津を経て香港に逃れるが、滔天はここで康と連絡を取り、日本亡命の援助をすることになる。この時、滔天は康が日本とイギリスの力を借りて、皇帝を擁して再起を図ろうとすることは中国にとっては愚策に外ならず、外国の干渉の端を開きかねないことを認識していたが、今となっては策の是非を論じる余裕もないため、取り敢えず彼を日本で保護する必要があると述べている[29]。日本到着後、滔天は革命派と変法派の合同を図るべく孫文と康有為の会談の場を設けようとした。しかし、康の頑なな姿勢のため両者は接触することすら叶わず、結局、孫康提携計画は失敗に終わったのである。

滔天の康有為への期待が完全に失われるのは、1900年６月の孫文の香港行に加わり、更にシンガポールに渡った際に、当地に在った康有為との面会を求めたものの拒否され、逆に李鴻章から送られた刺客と誤認されて、官憲によって逮捕・勾留されるという事件によってである。滔天はこの後、「何ぞ測らん昨の知己は今の知己にあらず、而も却て冠するに一大耻辱の名を以てせられんとは」と嘆き、康をして「善く皇帝の知遇に泣いて、而して友人の義誼を解せざるの人」と評して決別を宣言したのである[30]。

それでは、滔天の思想と行動において、康有為との連携構想はどのように位置付けられるのであろうか。彼は多くの箇所で、それが思想信条の相違を越えた、「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず」の精神からの援助であったことを強調している。また、革命派と変法派の連携が満漢の衝突を回避しつつ中国の共和制移行に有効に働くと考えたという説明も、決して理解できないわけでもない[31]。しかし、恐らくそれだけではあるまい。何故なら戊戌変法の際の中国視察にしても、２年後のシンガポールでの康との接触にしても犬養の指示によるものであったからである[32]。1896年の方針転換以後の滔天は、思想としては支那革命主義を掲げつつも、政治行動の面においては権力に

29 「犬養毅・平岡浩太郎宛」（1898年10月１日）、『全集』第５巻、354頁。
30 「三十三年之夢」、168頁。
31 「支那革命物語」（1916年10月～1917年12月）、『全集』第１巻、381頁。
32 「宮崎滔天年譜稿」、『全集』第５巻、666、671頁。
33 渡辺京二は、滔天の一連の行動を「日本政府の謀略ないし外交活動の手駒」の範囲を出るものではないと見ている（『評伝　宮崎滔天』、152頁）。

従属的であったと考えられる[33]。してみれば、一連の康有為との連携構想は、思想に基づいた主体的な革命的行動と見なすことは困難である。しかし、革命運動を実利的に捉える孫文にとっては、滔天のそうした行動は必ずしも排除すべきものでもなかったと言えるであろう。

1900年10月の孫文による恵州蜂起において、滔天はこれに呼応すべく準備にかかったが、中村彌六の武器売却という裏切りもあって蜂起は為す術もなく敗れ去った。この時期の滔天の革命についての考え方は、蜂起とほぼ平行して書かれた「独酌放言」に現れている。彼によれば、中国は分割の危機にあるが、それは列強の思い通りに進むことはない。そもそも、分割が目前となったなら中国人はそれを座視することはないからである。それを強引に分割するとなれば、その分割区域には土匪征伐のための多数の兵隊を備え付けなければならず、それはかなりの出費を要することとなる。そればかりでなく、列強は互に境を接して勢力のバランスを取って行く必要があるのだが、その間には必ず猜疑心が生じることになり、各国の増兵競争という事態が生じる可能性がある。それは際限なく続くことになり、最終的には以下のように帝国主義列強の危機を招来することになる。

> 今の通り慾張ってやってゆきをると財政の紊乱を生じ、財政の紊乱は社会党虚無党が横行する結果を生じ、所謂帝国主義反対の勢力を惹起す。下万民に取っては三度の飯を二度に減じてでも国の区域を拡めねばならぬと云ふ希望はないからねェ。一将功成って万骨枯れ[ママ]サ、一国土地を拡めて蒼生が青くなる時が屹度来るよ[34]。

滔天はここで、欧米における社会党や虚無党の決起による革命の発生を予想している。それは西欧の帝国主義体制を根底から崩壊させることになり、それによって列強諸国は中国の分割はもとより利権を求めての干渉も不可能となり、最終的に中国革命の実現を可能にするものと考えられたのである。ここには、主観的かつ楽観的な後進国革命への期待というものが見られるのである。

しかし、現実の中国の革命運動は恵州蜂起の失敗によって挫折する。この後、滔天が桃中軒雲右衛門の下に弟子入りし、浪花節語りとして革命の宣伝と同志の糾合に務めたことは良く知られている。それは、後に自ら語っているように、革命運動の挫折の責任を取ったものであったことは確かであろう[35]。だが、思想面において滔天は新たな傾向を見せ始める。それは、1903年から翌年にかけて書かれた「明治国姓爺」においてである。今、少しくその内容と特徴を見ていくことにしよう。

「明治国姓爺」は堺鉄男という少年の冒険譚である。鉄男は平戸に生まれ、幼少の

34 「独酌放言」（1900年10月）、『全集』第3巻、平凡社、1972年、18頁。
35 「軽便乞丐」（1914年9月）、『全集』第2巻、488頁。

頃に日本がロシアに領土を奪われたことを知り、それに復讐すべく学問と武術に励み、更にはロシア語を学び、密漁船の通訳として千島に渡ろうとする。途中、ウラジオストクを経て樺太に渡るが、官憲に発覚して別の船に乗り込むが、嵐に巻き込まれ遭難したところを中国船に拾われ上海に連れて行かれる。しかし、今度は漢口で革命の暴動に遭遇し、ロシア船に潜り込んでペテルブルグに至るというのが物語のあらすじである。物語の中で、鉄男は訪れた都市や船中で個性的な人物と出会い、その思想を語り合っており、この物語は言わば滔天の思想的信条の発露の場となっている。

先ず、ウラジオストクと上海で出会う孫霞亭という中国人革命家が登場するが、この人物が孫文を暗示していることは言うまでもない。孫は、「一国の政府なるものは王道の大義に基いて政を執るべきものであって、外に対しては四海兄弟の義を明かにし、内に於ては一視同仁の意を体して、之を拡張し進歩せしめて、始めて政府たるべき義務を全うし得たと云ふものである」として、今これに反している清朝政府を革命によって倒すことは当然の権利であると主張する[36]。また、「支那の改造さへ出来れば、樺太も取戻すべしだ、印度安南も取戻すべしだ、浦塩香港も取戻すべしだ、比律賓も暹羅も緬甸も以て振起すべきすべきではないか」[37] と述べ、そのアジア革命論を提示している。こうした点では、この物語は滔天の従来の支那革命主義の延長の側面も見せている。しかし、他方において滔天は、政治が「唯国を治め民を政（ただ）すの方便である」として、政治体制は時と場合と人民の知識の程度によって定まるものとし、政治体制の相違を殊更に重視すべきでないとする姿勢を示している[38]。

むしろ滔天は、この物語で政治体制の如何よりも国家を超越した状態を理想としていた。彼は物語の中で、国家の存在が世界の争いの源だとするフランス人医師に次のように語らせる。「敢て利害喜憂を異にする所以のものは唯一国家なる観念あるが為めで、此観念さへ取り除けば何時でも親めるのだ、利害も一致するのだ」。「国家なる名称は、泥棒なる君主が世界の一部を占領した贓品の呼称で、決して正当合理の名称でない」。「是を破壊し撃砕すべき責任こそあれ、忠勤を励むの馬鹿者たるべきものでない」[39]。これは明らかに無政府主義者の言である。そのような立場に立てば、「支那の復興をして打撃を欧洲に加へんとするは所謂防禦的進撃で、識らず知らずの泥棒的根性に魔せられて居る」のであって、そのような考えは「泥棒の提灯持か国家の幇間」に導きかねないものであるとされる[40]。ここに滔天は、自らの支那革命主義に対する疑問を呈するに至ったと言えよう。既に「独酌放言」の中においても、「国の興亡盛衰は一時の事だ」、「国が亡びても人類が亡びねば好い」[41] という言葉が現れており、

36 「明治国姓爺」（1903年8月～1904年1月）、『全集』第3巻、122頁。
37 同上、139頁。
38 同上、172頁。
39 同上、207頁。
40 同上。
41 「独酌放言」、12頁。

滔天の中では国家否定の傾向が一層深められたと見ることができるであろう。しかし、にも拘らず、彼は現実の中国の革命運動を支援し続けた。

1905年 8 月、中国同盟会が結成され、滔天も日本人であるにも拘らず会員に列せられた。翌年 9 月、彼は同盟会の運動を側面援助すべく『革命評論』を創刊し、ここに数篇の記事を執筆している。しかし、そこではアジア主義的傾向は後退している。むしろ彼は、民族や人種を超えた「四海兄弟、自然自由の境」を理想社会として考えていた。それは、無政府主義、社会主義、共産主義という名称で括ることができるものではない。滔天は、社会の進化が如何なる進化を見せるかは予想がつかないものの、将来においては「但敵視せる人類が兄弟となり、不自然なる自由を脱して自然の自由郷に到達すべきを信ずるのみ」[42] と述べる。そのような状況に達すれば、そこでは君主を戴くも、大統領を戴くも、如何なる政体を選ぼうとも可であると説いている[43]。そのように曖昧なることは、人類のうち未だ理想の帰着点に到達した経験を持つものがないという事実に加え、先に「明治国姓爺」で示した「[政治は] 国を治め民を政(ただ)す方便」であるとする信念が生きていたためであると言える。このように、辛亥革命に至る過程での滔天は、現実の政治活動とは別に、思想的にはアジア主義を超える地点にあったと見ることができるのである。

武昌蜂起発生の後、滔天は11月の中旬に中国に渡り、孫文不在の中、黄興を暫定的な指導者に推して革命派の安定に努める一方、袁世凱との妥協には反対するとともに、「今や支那は青年の天下也。孫黄の天下也。ナマジ古役人を用ゆるは却って禍をのこす所以也」[44] として、岑春煊のような古い人物に頼ろうとする意見には反対の姿勢を見せていた。また、これまで革命運動に協力してきた日本人浪人も、今後は「余り出しゃ張らず新しい真志士軍人を紹介して、彼等に功を成さしむるが肝要と」[45] 考えていた。ここから、彼は主体的に中国革命に関わることを断念したと見なし、それが彼の思想が現実の中国革命を超える地点にあったためであるとする見方もある[46]。しかし、そのような評価は事実からかけ離れているように見える。何故なら、滔天には革命運動の中の際どい政治的駆け引きの場にいた事実もあるからである。

その一例を挙げるなら、孫文の満洲譲渡計画への関与であった。すなわち、武昌蜂起後の革命軍は、戦闘地域の拡大と戦闘の長期化につれて、武器弾薬の支出のために多額の資金を必要としていた。そのため、革命軍は日本に援助を求めたのであるが、1912年 2 月に桂太郎の意を受けた三井物産の森恪から孫文に向けて、革命援助の見返りに満洲の日本への譲渡が持ちかけられていた。そのような動きの中で、 2 月 3 日の

42 「革命問答」(1907年3月)、『全集』第2巻、615頁。
43 同上。
44 「宮崎槌子・長江清介宛」(1911年12月12日)、『全集』第5巻、378頁。
45 同上、379頁。
46 『評伝　宮崎滔天』、252頁。

南京での会談の際には滔天が証人として列席していたのである。この時、孫文は森の提案を受け入れる姿勢を示したが、結局は日本政府の応諾が得られず計画は挫折していた。滔天は革命の最終局面まで革命の現場に関わり続けたのである。しかも、滔天が満州譲渡計画に関わったのはこれが最初のことではなかった。1910年11月、滔天は孫文の意を受けて長谷川好道陸軍大将と面談しているが、その時の用件も満洲譲渡を条件とした軍事的支援の要請であった[47]。この申し出は日本によって拒絶されたが、滔天の甥である築地宜夫はその時の滔天が、日本の対応を「其短見、狭量、頑迷を及ぶべからずとなし、東洋諸民族の将来の為めに、非常に残念に思うて居た」[48] と記している。ここからは、滔天が政治的取引にかなり積極的であったことが窺える。今のところ、1912年２月時点での滔天の心境を知る手掛かりはない。しかし、少なくとも滔天は孫文の満洲譲渡計画を支持していたことは推察される。ここに、滔天の思想と現実の政治行動との乖離を見ることができるのである。

第３章　アジア主義の再構築

滔天の思想は、原理的にはアジア主義を超えるものであった。しかし、理想に向かうための第一歩がアジアの変革であることには変わらなかった。例えば、1912年９月に中国から帰国した際に、家人に向って「さあ、今度は印度だぞ！」[49] と述べたことは、当時の彼が中国革命を次の革命へのステップだと考えていたことを示している。また、第二革命の敗北が目前となった状況の下で、彼は渡米を計画する黄興を思い止まらせて日本に行かせ、孫文と共に朝野の間に遊説させて真の「日支同盟」を作る必要性を述べていた[50]。滔天は中国革命運動の再建のために、アジア主義のやり直しを考えていたのである。それは、自らの思想的到達点とは別の次元からする、政治との関わりであったと言える。

第二革命敗北後の滔天のアジア主義は、日本の対中国政策に対する批判という形で現れることになる。そのことを典型的な形で示すのが、1915年３月に行われる衆議院議員選挙への立候補の際の主張である。彼は当時の世界情勢を次のように述べる。すなわち、大戦終結後のヨーロッパは帝国主義と非帝国主義の衝突が続くであろうが、帝国主義が滅びなければ彼らが餌食を求めて東アジアに向かって来ることは必定である。そうだとすれば、この際日本は、国是の大本、国防の大方針を定めて、「対支問

47 「宮崎滔天年譜稿」、700頁。
48 「宮崎滔天」、496頁。
49 「宮崎滔天」、497頁。
50 「宮崎槌子宛」（1913年８月31日）、『全集』第５巻、393頁。
51 「立候補宣言」（1915年２月）、『全集』第２巻、口絵写真より。

題ヲ根本的ニ解決シ、以テ大亜細亜主義ノ根底ヲ確立スル」ことが必要である[51]。具体的に言えば、それは日本政府に袁世凱支持をやめさせ、孫文らの革命派を支持せよというものであって、帝国主義に対抗すべく、革命派と提携せよという従来からの姿勢の延長線上にあった。

1917年から18年にかけての滔天のアジア主義言説は、かなり錯綜した形で提示される。17年、彼は前年に亡くなった黄興の葬儀に参列すべく中国に長期滞在する。彼は、黄興ゆかりの湖南省の明徳学堂において講演を行っているが、そこでは次のような文言が述べられていた。

> 敵し能く亜洲を以て亜洲人の亜洲と為し、欧美人の亜洲と作すこと勿く、黄人を我が黄種の黄人と為し、欧美人の黄人と作すこと勿く、同種の人を合わせ以て白人に抗するは、宮崎の希望する所なり[52]。

これは人種主義を強く感じさせる言説であり、これを以て滔天の思想の多層性を示すものと見ることも可能である。しかし、ここでの黄色人種の強調という言説は、むしろ旧友へのオマージュとして読まれるべきであって、仮に彼の中で人種主義が持続していたとしても、それは既に彼の思想の主柱ではなかったと見た方が妥当である。そのことは、以下のようにロシアの革命政権の承認・提携を主張する姿勢からも理解されるのである。

ボルシェビキ政権成立後の状況下で、滔天は、日本が「ならう事なら新露西亜、新支那を助けて、其国礎を確立せしめ、以て永久の親睦を結び、以て皇徳に光被せしむべきである。［中略］若し新露西亜を抑へて之を敵とし、新支那を抑へて南方人を敵とする最終の結果如何を考ふれば、実に寒心に堪へざるものがある」[53] と述べている。既に滔天は、ロシア２月革命の時点で、これを「快心の事」として好意的に評価し、「若し純民党の主権に帰せば是迄我等を疑惧せしめたる露国勢力の東漸は多く憂とするに足らざる可く」云々と述べており[54]、今これが実現した形となったのである。滔天が、日本政府の北京政府支援の姿勢を改め、「新支那」すなわち孫文の広東政府を支援せよとするのは当然としても、アジア以外の国家と提携せよと説いたのは初めてのことであった。しかし、彼の政治的主張は「日支同盟」にロシアを加えたアジア主義の方向に進むことはなかった。それは、後に見るように、彼の共産主義に対する評価に関わっていた可能性もある。

1918年半ばの滔天は、日本の軍閥政治家たちによる対中国政策への失望の余り、自

---

52 「我校歓迎宮崎先生大会記」（1917年４月１日）、『全集』第５巻、713頁。
53 「南北妥協問題に就て」（1918年５月１日）、『全集』第４巻、329頁。
54 「水野梅暁宛」（1917年３月28日）、『全集』第５巻、454頁。
55 「銷夏漫録」（1918年７月～）、『全集』第４巻、335頁。

らを「悲観病」[55] と称して、将来に向けての絶望的な言説を繰り返すようになる。明らかに、彼ら政治家たちの北方政権支援という形の「日支親善」は、滔天のアジア主義実現の可能性を阻むものであった。しかも、彼らの政策は日本を亡国に陥れかねないものとも考えられた。しかし、そうした中での次のような言説は、彼の国家と民族に対する考えを示していて興味深いものがある。

> 唯一言したきは、日本が亡国となれば、無論中華民国も亡国です。併し彼は国家的に亡びても、或は理想的に生き得るかも知れず、理想的に生き得ないとしても、民族的には亡びません。啻に亡びぬばかりでなく、或は却って大に発展するかも知れません。支那民族は民族として発展すべき総ての要素を兼備して居ます。それに引替へて我日本は如何でしょう。国家的に亡びたならば、民族としての日本人は、私は心細く感ぜざるを得ないです。[56]

同じく亡国を迎えたとしても、日本と中国とでは民族としての生存の可能性に大きな違いがあると言うのである。それは、滔天が20年以上前にシャムで実見した中国人の民族的強さ、そして自主独立、自律自治の精神に対する敬服の現れであったようにも読み取れる。そして、ここでは国家の滅亡か否かがさしたる問題ではないとすれば、人間の唯一の所属先は民族と考えられていたかのように見える。しかし、彼の中では、「人類の一員として生きたいのが私本来の本願」[57] という表現に見られるように、人種や民族は既に人間を分ける単位ではなく、更なる理想の境地があると考えられていたはずである。それにも拘らず、この時点で彼が中国の生存の可能性の根拠として民族的要素を挙げたことは、それがこの時期の彼の悲観病を救う唯一の目安と考えられたからではないだろうか。

さて、1918年１月に出されたウィルソンの14ヵ条の平和原則は、第一次世界大戦の講和原則、ひいては大戦後に実現されるべき国際秩序の構想を全世界に提唱するものであったが、これは滔天の思想に大きな影響を与えることとなった。彼によれば、過去にはアジアにおける「白人禍」に対抗する戦いがあったが、今は舞台一転の時であり、この新舞台において世界人道の幕が開かれるとしたら、日本は進んで大戦後の世界の大勢に従うべきであるとの考えを表明している[58]。世界の大勢とは、ウィルソンの主張に現れているように、「世界的立場」に立脚して世界改造の大事業に参画することである。その中心となるのが国際連盟であった。彼は言う。「ウヰルソンの国際連盟世界改造なる語は、今日に於て当を得たり。但し如何んか連盟し、如何んか改造

56 同上、334頁。
57 同上。
58 「東京より」（1918年11月10日）、『全集』第２巻、39頁。
59 同上（1918年12月９日）、同上、51頁。

せんとする、是れ今日以後の見物也。願はくは総てをして徹底的にならしめよ。国家的に偏せずして人道的に徹底せしめ、人種的に偏せずして、人類的に徹底せしめよ」[59]。恐らく彼は国際連盟が、「明治国姓爺」で提示したように、国家を超越する世界に近づく一歩となるものと考えたのであろう。

然るに、以上のような立場とアジア主義は両立が難しいことは明らかである。むしろ、それに対する評価は厳しいものとならざるを得ない。滔天は、孫文がアジア主義を標榜して機関誌を発行する計画があるとの情報に接すると、「実に結構なる企て也」としつつも、「されど之をレニン君に問はんか、亜細亜とは誰がつけし名称ぞやと笑はん。更に之を日本人に語れば、又しても孫の空想かと嘲らん」[60] と記している。また、「亜細亜主義に偏して継子根性を発揮するは愚の愚なり」[61] とも述べており、ここでは「アジア」の強調がマイナスのイメージを以て語られていることが容易に理解されるのである。むしろ滔天は、ヨーロッパの侵略主義が衰退したと考え、アジア主義は存立し得ないのではないかと考えているのである。ここに至って、滔天はアジア主義から一時的に離脱したと言うことができるであろう。

さて、滔天にとっては、世界的立場か否かに関わりなく、中国人に対する日本人の差別的態度は許し難いものであった。「白人に怯にして同種同族に驕なる」日本人が、自らを君子国と称することは恥ずべきことと考えられた。彼によれば、日本人は白人に対しては陰では「毛唐」などと言いつつも、面と向かえば彼らに諂い歓心を買うことに努める一方で、中国人に対しては奴婢に接するが如く、二言目には「チャンコロ」と罵るのが通例である。今や、かつての大和魂や武士道などは無きに等しいのである[62]。そのような差別主義的体質を持った日本が、パリ講和会議の場において「人種的差別撤廃提案」を行ったことは、滔天からすれば本末転倒した行為と考えられ、彼は終始これに批判的な姿勢を取り続けた。そもそも、日本が講和会議で人種的差別に反対しておきながら、南洋のチューク（旧称・トラック）諸島を委任統治領として求めることは「病人の囈言」にも似たものであり[63]、正義人道の主張に悖るものであった。そして、彼は次のように述べる。

> 人種案の如き、問題としては好箇の問題也。唯我が言ふ所の人種案なるものが、甚だ不徹底なるを憾みとす。若し我に於て、朝鮮を解放し、台湾を解放するの決意を以て絶叫し、提案し、遊説し、努力せば、彼等の看板たる人道正義の手前、多少の反響を与へたるや論なし[64]。

60 同上（1918年12月４日）、同上、47頁。
61 同上（1918年12月19日）、同上、55頁。
62 「東京より」（1918年11月12日）、『全集』第２巻、41頁。
63 同上（1919年２月13日）、同上、81頁。
64 同上（1919年４月９日）、同上、119～120頁。

人種的差別撤廃の主張は、日本の植民地支配を終わらせる覚悟がなければ、何ら説得力を持つものではなかったのである。当時の日本政府や日本人全般にそのような覚悟があるかと言えば、恐らくなかったであろう。そうだとすれば、日本による人種的差別撤廃の提案は徹底さを欠いたもので、全く意味をなさないものであった。彼はこの問題に関しては、一貫して冷静な姿勢を崩すことはなかった。彼は、戦勝に伴うナショナリズムの昂揚から自由であったと言えよう。

しかし、国際連盟やウィルソンに対する滔天の期待は長くは続かなかった。既に1919年２月には、彼は「彼等の国際連盟は、一面軍国主義に対する予防にして、其半面は正義人道主義に対する防禦也。即ち正義人道の仮面を被れる泥棒也」[65] と述べていた。また、ウィルソンに対しては、彼がアメリカ国内の反対派に遭って国際連盟参加を見送ったこと、そして４月の人種的差別撤廃提案の採決の最終段階で反対派に妥協したことを以て、「腹黒き政治家」と断罪するに至る。滔天は、このような政治家によって唱えられる正義人道なるものが、日中両国の軍閥によって唱えられる「日支親善」と同様に、百年河清を待つに等しく、実現の可能性が全く存在しないことは明らかであると述べている[66]。いずれにせよ、世界の大勢たる世界的立場が正義人道に繋がるものでないことが明らかになったのである。

それでは、日本の採るべき方向は如何なる道か。滔天が選ぶべき方向と考えたのは、列国と協調を保ちつつ、「徹底せる人道主義を基礎とせる亜細亜連盟の主唱者となり、朝鮮を解放し台湾を解放し、更に支那に対する外交を一変して親善の実を挙げ、爾余の諸弱国を助けて平等組織の下に連邦を組織し以て白人に対抗すべし」[67] とする道であった。「亜細亜連盟」なるものは彼の言説としては初めて登場するものであるが、これは滔天本人も述べているように、1919年３月23日に開かれた第２回人種差別撤廃期成大会におけるポール・リシャールの発言を受けてのものであった。リシャールはこの時、日本が人種的差別撤廃を主張するよりも、アジアの統一と独立を図るべきだとして次のように述べていたのである。

> 亜細亜民族の間には人種的差別無きや、諸君は亜細亜の一部に対し人種的差別を与へ居らざるや如何、故に予は此の機会に於て諸君が亜細亜民族の間に、先づ以て人種的差別を撤廃し、精神的に亜細亜連邦若くは統一ある独立組織の同盟を画策されんことを望む[68]。

滔天は大戦後の世界的立場の虚構に気づき、リシャールの刺激を受けて再びアジア

65 同上（1919年２月13日）、同上、80～81頁。
66 同上（1919年４月25日）、同上、127頁。
67 同上、128頁。
68 同上（1919年３月24日）、同上、108頁。

主義に回帰することとなったのである。そして、その新たなアジア主義は先にも示したように朝鮮と台湾の解放を伴うものであって、当然そのことは彼の地の住民が独立精神を持っていることが前提とされるべきものであった。しかし、滔天のこの後の中国や朝鮮における排日や独立運動についての見解は、必ずしも整合性を以て論じられるのではなく、しばしば矛盾した言説を伴いつつ展開されることになる。

五四運動に対する滔天の反応は複雑であった。彼は中国における排日感情の原因が、日本人の持つ差別感情や商人たちの利益至上主義にあると認識していた[69]。そのため、事件発生直後の滔天は、山東の利権獲得が必ずしも日本の利益となるものではないことを指摘し、むしろこの度の利権獲得によって、中国の民心を敵に回して全国的な排日運動に繋がることを危惧していた[70]。彼はこの時点では事態を冷静に見ていたと言える。しかし、5月8日に発せられた張継・戴季陶・何天炯の連名による「日本国民に告げる書簡」に接すると、旧知の人たちによる日本批判であった意外さもあってか、これに強い反発を示し、「物先づ腐って虫之に生ず、我が軍閥外交の行はるゝは、之を誘引するに足るべき腐敗物の存在するが為めならずとせんや。腐敗物とは何ぞや、支那の軍閥官僚は即ち是也」[71] と述べて、排日運動発生の原因が中国側にあったとした。更に彼は、この運動が山東問題に名を借りての鬱憤晴らしだとし、山東における日本の働きをも無視して利権の還付を求めることは、余りにも日本を侮辱した振る舞いであると批判している。

こうした主張は、一歩間違えば日本擁護にも受け取られかねないものであるが、滔天にしてみれば、日本と中国は「グズグズすると共に白人にしてやられたるべき運命に置かれたる国」[72] であるが故に、内輪もめをしている場合ではないとの思いがあった。「亜細亜連盟」形成のためには、排日運動は抑えられなければならないと考えられたのである。加えて、排日に伴うボイコットは日本人に反省を促す示威運動としては有効かもしれないが、同時にそれは日本人を苦しめるという点では既に時代遅れの手段であるとも考えられていた[73]。それ故、1919年11月に起きた福州事件に際して、学生たちによるボイコットの噂を聞いて「聊かウンザリせざるを得ず」との感想を漏らし、排日運動は「万一日本に打勝ちたりとするも、前門犬を防いで後門更に虎を迎ゆる」に等しい行ないであると述べている[74]。愛国運動は帝国主義の介入を誘引する原因となっているのであって、中国の学生たちは世界の大勢に順応して、国家的桎梏から脱しなければならないと言うのである。

ここでは、再び「世界の大勢」としての世界主義的立場から中国の排日運動に批判

69 同上（1918年11月12日）、同上、41頁。
70 同上（1919年5月8日）、同上、131～132頁。
71 同上（1919年5月13日）、同上、135頁。
72 同上。
73 「久方ぶりの記」（1919年10月）、『全集』第4巻、418～419頁。
74 「旅中漫録」（1919年11～12月）、『全集』第4巻、440頁。

が加えられているのであるが、しかしそれが欧米列強に対向するアジア主義の正当化のためのものであったことは、この時期の滔天のアジア主義がナショナリズムの超克の上にあるべきものと考えていたことを示唆している。例えば彼は次のようにも記している。「若し［東アジアの勢力関係という］此の機微が察し得らるゝとすれば、排日や独立騒ぎは無用の業だ、寧ろその犠牲と努力を挙げて彼等自身の積極的向上主義に捧げ用ゆるを賢なりとする。積極的向上主義とは何か、世界人類主義則ち是れだ」[75]。明らかに、滔天は植民地の解放を唱える一方で、現実の解放運動に直面すると、ナショナリズムよりも世界人類主義を勧めるという矛盾を犯していた。そうした矛盾は、彼の思想の奥底に入り込んだ国家否定の理想に起因するものでもあったであろう。

しかし、滔天のアジア主義の新たな提示は決して情熱と確信を伴ったものではなかった。むしろ、そこには強い悲観主義が表出している。すなわち、彼はその過程において、自らの中国革命との関わりを醒めた目で振り返り、かつての支那革命主義についての自己批判を行ない、かつそれとの決別を宣言しているのである。彼は1919年の初めに書かれた文章において、かつて「三十三年之夢」の中で説いた理想を、ウィルソンの「世界的立場」に仮託したことの誤りを認める[76]。そして彼は、これまで中国革命に費やした努力を、なぜ日本の改善に尽くさなかったのかと自問する。これに対して、滔天は次のように答える。日本には世界を動かす力はない以上、中国を理想国たらしめば世界を変革し得ると考えて、「自己の誇大妄想的経路を辿って来た結果が即ち今の我が身の上」であるのだと。しかし、彼はもはや支那革命主義は誇大妄想だとし、「今や私は此の妄想より醒むべき時期に到達しました」と述べるのである[77]。そもそも、日本は中国のために何もしてやれなかったではないかと彼は言う。日本の頑迷政治家は、取りすがる革命主義者を突き放し、併せて守旧派までも突き放して欧米人の手に渡そうとしている。最早、そのような日本は「支那に於て無用の長物」だと見なされたのである[78]。滔天の「悲観病」はなお持続しており、彼のアジア主義の再構築はそうした精神状況の中でなされていたのである。

滔天はアジア主義を政治的運動として考えていたが、その果てには如何なる社会が求められていたのであろうか。既に、彼の中に国家を超える思想があったことは繰り返し述べたところである。彼は理論的体系化を得意とするところではなかったため、それを具体的な形で示すことはなかった。しかし彼は、自らを社会主義として自覚していたことは事実である。彼の言葉によれば、「それは過激主義でもなく、共産主義

75 「出鱈目日記」（1920年9月24日）、『全集』第3巻、489頁。
76 「炬燵の中より」、『全集』第3巻、237〜238頁。なお、この文章は友人との会話という形式を取っているが、榎本泰子も指摘しているように実際は滔天自身の自問自答と見た方がよいであろう（『宮崎滔天』、233頁）。
77 同上、246頁。
78 同上、249頁。
79 「久方ぶりの記」、417頁。

でもなく、又無政府主義でも国家社会主義でもない一種の社会主義であって、十年前に著はした『三十三年之夢』にも発表した至極穏和な社会主義である」[79]。前述したように、滔天はアジア主義者の観点からロシア革命には好意的に反応した。それは、革命によって列強の脅威の１つが消滅したという意味においてであった。彼は日本においても革命の到来は不可避であり、それは共産主義革命という形態を取る可能性もあると考えている。何故なら、現在の労働者階級の自覚の程度と、資本家政治家の覚醒の程度には、余りにも大きな間隔があり過ぎるからである[80]。しかし、共産主義は個人の自由を抑圧するという点で大きな問題を持っている。

> 共産社会は、個人の自由性を奪ひ取って、同一型に打ち込まんとする一種の牢獄也。少くとも軍隊生活也。敵国外患ある場合若くは或る目的の為めに国外に発展せんとする場合に便利なる組織なるは言を待たずと雖も、人間幸福の上より之を見れば、浅間敷くも窮屈なる社会なるべし[81]。

滔天は異なった個性が発揮されることを至上の喜びと考えていた。そのような立場からすれば、自由を強調するクロポトキンの無政府共産主義ですら不十分であった。このように、滔天は自由と個性を強調し、将来に無権力社会を求めていたが、それはヨーロッパに起源を持つものではなかった。むしろ彼は、そうした思想には殆んど価値を置いていなかった。それは大戦後の文明観の影響によるものでもあろうが、今後はアジア固有の文化が全世界を照らす日が来ると考えられていたのである。滔天は西洋の物質文明が自滅の道を歩み始めていると見て、それがこれまでの西洋人の行ないに対する「自然の応報」であるとする。それでは、西洋的近代をモデルとした日本はどうかと言えば、西洋文明にかぶれ過ぎたため多少の反動は免れない点もあると言う。しかし中国は殆んど無垢に近い。そのため滔天は、「支那の先覚者が、徒らに新しがらず、支那をして文明の余毒を受けしめず、支那固有の社会政策を根拠として新社会を打開せんことを望む」ことになるのである[82]。

それでは「支那固有の社会政策」に基づく新社会とは如何なるものか。それは、中国古代の「三代の治」をモデルとする、農業を中心とした人民の自治社会であった。滔天は言う、「人間の智慧は遠の昔に行詰まれり。三代の作は文化の極致と知らずや」[83] と。それを更に具体的に表現すれば、「土地の正当なる分配に依って生活の安定を農業におき、自然的因果律の下に節制ある個人自由主義を基礎とする、理想的自治社

---

80 「出鱈目日記」（1920年３月15日）、316頁。
81 同上（1920年５月24日）、384～385頁。
82 「久方ぶりの記」、419頁。
83 「出鱈目日記」（1920年11月21日）、519頁。
84 「世界の大勢に引摺られて」（1920年４月）、『全集』第２巻、656頁。

会」[84] であった。顧みれば、「三代の治」は滔天が彌蔵と共に支那革命主義を唱え始めた頃からの理想の社会であった。中国根拠地論としての支那革命主義は放棄されて久しいものの、理想としての「三代の治」は彼の中に一貫して生き続けていたことが確認されるであろう。しかも、ここに至って中国固有の理想世界は、滔天によって人類の未来に普遍化されることになったのである。

おわりに

本稿では宮崎滔天のアジア主義に焦点を当て、その思想的変容と特徴について考察してきた。本稿で明らかにされたのは以下の諸点である。

滔天が彌蔵の影響を受けてアジア主義者として出発したのは1891年のことであったが、彼の思想はその出発点から他のアジア連帯論者とは異なって民権論を立脚点としており、中国を根拠地として日本を含む各国の社会的変革によって、既存の国際システムを変更しようとする点で特徴的であった。しかも、滔天の考えの中には日本を盟主とする発想はなく、この点において当時のアジア・モンロー主義の流れとは対極にあった。しかし、彼には中国革命の可能性についての客観的な分析を行った形跡はなく、彼のアジア革命論は主観的な革命願望に支えられていたと考えられる。

滔天はアジア主義者として中国の革命運動を熱心に支持し続けた。それは彼の思想的純粋さに支えられたものであることは確かである。しかし、その一方で、彼の支援活動は1896年における方針転換を経て、政治家との繋がりの中でなされたものであった。戊戌政変後の孫文と康有為の提携計画が、犬養毅の介在によるものであったことは、滔天が決して脱世俗的なアジア主義者ではなかったことを示している。彼は革命の実現が、思想の力に頼るだけでは不可能であることを知っていたのである。

同時代のアジア主義者の中で、滔天が際立っていることは、日本の対外膨張主義に反対したばかりでなく、その思想が国家を超越する地点にまで到達したことにある。それはフィクションの世界で示されたものであって、体系化されたものではないが、そこではアジア主義ですら否定の対象と見なされていた。それは明らかに無政府主義の境地に近いものであった。当時の日本には、限定的ながら無政府主義に関する情報はあったとは言え、彼が如何なる情報を基に思想に取り込んだのかは現在のところ判然としない。或いは、それは曾てのイサク・アブラハムとの交流の名残であるのかもしれない。しかし、それが政治行動と合致した形を以て現れることはなかった。滔天の生涯の中で、それが一致する機会があったとすれば、それはウィルソンの14ヵ条の平和原則に多大な期待を抱き、世界的立場を今後の新たな潮流と考えた時であろう。しかし間もなく、現実の国際政治が正義人道とは無縁なものであることを知り、彼は再びアジア主義に立ち返った。このようなアジア主義からの離脱と復帰の過程は、彼

の中のナショナリズムと普遍主義の間の葛藤を示すものであった。中国の排日運動に対する矛盾した対応はその現れであった。しかし結局、滔天は思想と現実との矛盾を解決することはなかったのである。

滔天は1921年３月から１ヵ月ほど広東を訪問する。この時、彼は大宇宙教という新興宗教に精神的な救いを求めていた。途中で立ち寄った上海で、戴季陶や章炳麟と会見した際にも滔天は大宇宙教について熱心に説明するものの、彼らは「奇怪、奇怪」と述べるばかりであったと言う[85]。しかし、彼の中国の革命運動への関心は持続していた。彼は広東での革命運動の高まりを、民報社時代と軌を一にするものと感じたと記している。だが、この時も日本の態度如何が革命の成否の鍵を握ると考えていた。曰く、「若し我国の改造さへ出来れば、対外問題は問題ではない。看よ南方と云はず北方と云はず、皆手を額にして日本の真実なる厚意を歓迎すべく待ち構へて居るではないか」[86] と。しかし、日本は最後まで彼の期待に応えることはなかった。翌年12月、滔天は51歳で病死する。その２年後、国共合作を成立させた孫文は、日本を訪問して「大アジア主義」講演を行なうのだが、仮に滔天が余命を保っていてこれを聞いたならば、如何なる感想を持ったであろうか。自由なき共産主義を嫌いつつも、融通無碍な精神の持ち主であるが故に、アジア革命の大義から案外これを好意的に受け入れた可能性はあると言えよう。

85 「広東行」（1921年３～４月）『全集』第１巻、565頁。
86 同上、590頁。